



夏休みの宿題は終わらない

英・仏核燃料施設周辺に生きる人々と出会って…

私達は映画“六ヶ所人間記”（青森県上北郡六ヶ所村の人々とその生活を描いた長編記録映画）を3年間かけて1985年に完成させた。

この撮影が進行中の（1984年1月）、電気事業連合会が、六ヶ所村に核燃料サイクル基地（原発から出る使用済み核燃料を再処理する再処理工場、ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物貯蔵所などが集中した基地）を建設するとの報道があった。1985年4月に、青森県はこの立地を受け入れる。全く納得の行かない暴挙であった。激怒した。

この時から、私達は核燃料施設の先進国であるフランス（La Hague）、イギリス（Sellafield）を訪れ、施設周辺の人々に出会って、核燃と共に生活せざるを得ない人々が何を感じて、どのように生きているかを知りたいと強く思っていた。

しかし、“六ヶ所人間記”的完成は間近に迫っていたし、仕上げのための制作費捻出とその返済にも追われ始めていた。当時、英・仏に出かける事など不可能な夢であきらめた。

そして、上映に専念した。完成後、更に三年間かけて、青森県下40数ヶ所での巡回上映会もどうにか終えることができた。国内外でも上映され、1986年には、大変幸運にも、ドイツのマンハイム国際映画祭で、特別賞をいただいた。たくさんの人達がこれらの上映を支えてくれた。

3年目には借金も完済出来、鎖から解かれた気がした。

この間、ずっと六ヶ所村へは通い続けたし、今も通い続けている。村内の様子は訪れる毎に変わって行く。核燃料施設の事業者は幾度となく、フランス、ラ・アーグの現地から青森県にフランス人を呼び寄せ、“これら施設は全く危険ではありません。安全です”との説得工作キ

各界からの反響

日本映画ペンクラブ推薦

—1989年—

朝日新聞（11月2日）
英仏の住民とヒザを交えて話合った体当たりの人間記録だ。

毎日新聞（11月2日）
人間の愚かしさを改めて実感させられてしまふ映画だった。

東京新聞（11月16日）
映画の中には感傷的なコメントはいっさいない。

日本教育新聞（11月25日）
話してくれる住民たちの“証言”もまた衝撃的だ。

大下由宮子氏（デーリー東北 12月14日）
試写会で、ラストシーンの映像が消えても誰一人席を立てませんでした。言葉がありませんでした。

—1990年—

鈴木志郎康氏（イメージ・フォーラム1月号）
全篇を通して核燃料施設の問題が、生活意識のレベルで語られているわけであるが、その生活のレベルでドキュメンタリーが作られているというところに、この映画のよさがあるといえよう。

キリスト新聞（1月1日）
青森県六ヶ所村問題などを考えさせる日本人必見のドキュメント映画。

朝日ジャーナル（1月19日）
体当たりの取材で人の輪を広げ、多くの衝撃的な証言者に出会っていった。

社会新報（1月23日）
通訳なしの地域住民との直接対話が力強い。

読売新聞（1月25日）
衝撃的な事実が次々と明らかとなり、汚染の実態を克明にとらえた。

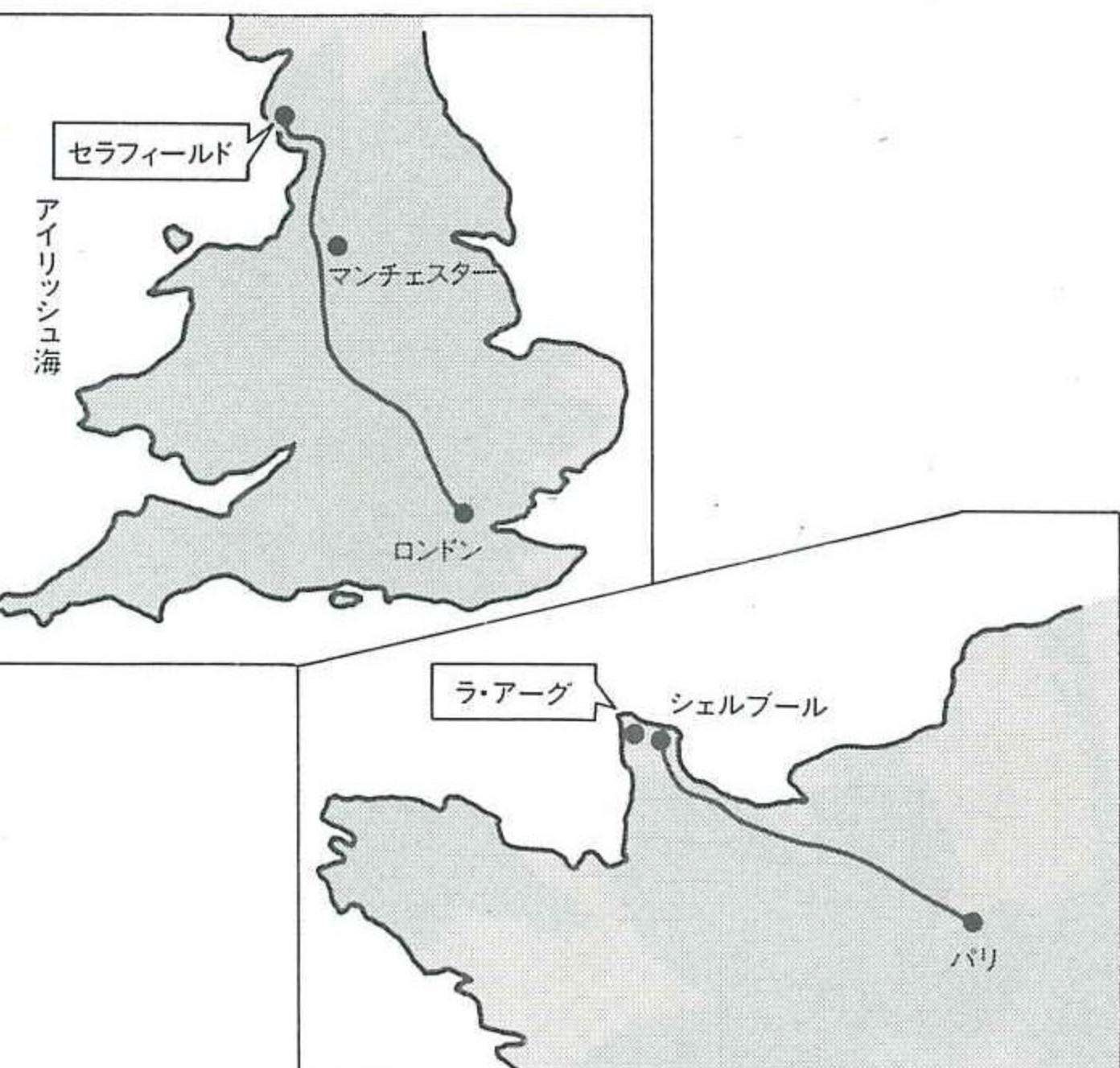
松田政男氏（公明新聞 1月25日）
何よりも驚かされるのは親子が訪れたフランスのラ・アーグにせよ、またイギリスのセラフィールドにせよ、一言で言い切れば、死

ヤンペーンを繰り返している。私達は青森に住んでいるわけではないが、青森に行く度に、おびただしい数のかれらのテレビコマーシャルや新聞広告攻勢に驚く。核施設と共に生活する事を謳歌している宣伝である。

チェルノブイリ事故以前にすでに、欧州のこれら施設における放射能汚染による被害についてある程度の知識を持っていた私達にとって、ぜひとも、ラ・アーグ、セラフィールドに住む人々と実際に会って、かれらの体験を聞きたいという1984年当時からの願いは消える事はなかった。

4年後の1988年夏、やっとその機会が作れた。今回は親子三人の一ヶ月の旅である。ラ・アーグ、セラフィールド両地ともに、その気候、地理、経済条件は六ヶ所村に酷似していた。私達が出会った人々は、六ヶ所村の人々と同じく、私達親子を暖かく迎え入れてくれた。そして出發する前には、想像していなかった様々な事実が私達の前に展開されて行った。

核燃料施設が操業して40年を経過したセラフィールド、20年のラ・アーグ、これら先進地に私達は、何を学んで行くのだろう？



の臭いが立ちこめていることだろう。
クロワッサン（1月25日）
割りきれない重さがこの映画から伝わってくる。
日本経済新聞（1月29日）
夏休みの駆け足の撮影旅行で3人の心に残ったものは、見る者にも宿題として投げかけられるのである。
ぴあ（2月1日号）
見えないところで徐々に侵蝕を続ける核の恐怖を淡々と浮き彫りにしてゆく。
村山匡一郎氏（シティロード 2月号）
核燃料施設の安全性というレッテルがいかにカッコ付きでしかないかを教えてくれる。
日刊ゲンダイ（2月2日）
ひたすら原子力拡大政策を推し進める日本の当局の“安全”キャンペーンもこのフィルムの前ではただむなしい。
かわなかのひろ氏（調査情報 2月号）
その内容において、その制作形態において、この作品はドキュメンタリーにとって貴重な一石を投じている。